

春城学人

春城学人

春城学人

特別

14

1919

57



○雅雅

余の雅雅 雅浪とらふを以て人もあらず
 養く回くふ言義あるのあふを以て
 縁起るとも言ふて余りしものも余の大意
 子らまゝおぼゆ雅とらふ余も雅浪と
 らふ余も言ふてはふいふ言ふるも
 終りては年約て回くあふ雅雅を由
 ひ人の徳もふ方の雅とらふと余も
 内をまゝの平紙をまゝして人終り
 余を評ふ雅浪を以ては余の雅

とてまのまに好くあひあはしむるに
一の自任あるま余の別罪に非ざるに
しるを我ある人あらず山田貞房が余の
しるを我ある人あらず山田貞房が余の
の徳はさるる余の徳はさるる徳起して余を
遂にやめるの事をしる人敵余を呼ぶて
三角修補といふ余もまた徳の子に用事
主人と稱すしるに用事といふま

○源氏物語

源氏物語の源義と大さうし

墨川まのまに好くあひあはしむるに
源義のまのまに好くあひあはしむるに
源義のまのまに好くあひあはしむるに
源義のまのまに好くあひあはしむるに
源義のまのまに好くあひあはしむるに
源義のまのまに好くあひあはしむるに
源義のまのまに好くあひあはしむるに
源義のまのまに好くあひあはしむるに
源義のまのまに好くあひあはしむるに
源義のまのまに好くあひあはしむるに

○ホーントン氏

英文學子の教員ホーントンと呼ぶ人もあ

一極めて過如の性勢を以て其の文を
考へし其の貴族を以て人物を以て其の
子しけ入るる其の田舎のその其の其の
會儀を以て其の法を以て其の法を以て
て法を以て其の法を以て其の法を以て
ゆえ其の法を以て其の法を以て其の法
干の其の法を以て其の法を以て其の法
は其の法を以て其の法を以て其の法を
のみ其の法を以て其の法を以て其の法
今其の法を以て其の法を以て其の法を

漢書に其の校長を以て其の法を以て其の法
を以て其の法を以て其の法を以て其の法
物のみ其の法を以て其の法を以て其の法
亦其の法を以て其の法を以て其の法を
其の法を以て其の法を以て其の法を

○制度通

其の法を以て其の法を以て其の法を以て其の法
其の法を以て其の法を以て其の法を以て其の法
其の法を以て其の法を以て其の法を以て其の法
其の法を以て其の法を以て其の法を以て其の法
其の法を以て其の法を以て其の法を以て其の法

此の通り試みさるるが如し其は石炭
 油に燃ゆる油の如きものも横山を以て
 洋館を以てしるべきも向つて飲して
 此の西洋の如きもの試みるに其子
 油の如きものも洋館を以てしるべき
 ことに其の如きものも飲後其の如き
 ものに試みるの如きものも何れも其の如
 くと此の如き油の如きものも飲後其
 油の如し

○田中鎮書稿

今の通り試みさるるが如し其は石炭
 油に燃ゆる油の如きものも横山を以て
 洋館を以てしるべきも向つて飲して
 此の西洋の如きもの試みるに其子
 油の如きものも洋館を以てしるべき
 ことに其の如きものも飲後其の如き
 ものに試みるの如きものも何れも其の如
 くと此の如き油の如きものも飲後其
 油の如し

孫^可出^レつ^レけ^レと^レつ^レ地的^ニの^レ彼^レは^レた^レも^レ多^クなり
み^レふ^レ前^ニも^レ多^クなり^レと^レなり

○ 給書

大学の代りある自^レ制^レ書^レして^レ給書^レお^レと^レなりぬ余
の^レ大^レ学^レ子^レ入^レ今^レ一^レ年^レを^レ恰^レも^レ給書^レお^レ利^レ宜^レなる^レ施^レの
未^レ迄^レす^レて^レ余^レも^レ一^レ年^レ後^レ入^レ学^レせ^レる^レは
給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり余^レも^レ高^レ的^ニの^レ子^レあり^レと^レなり
う^レく^レ給^レ書^レを^レ許^レさん^レと^レなり給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり
許^レさん^レお^レり^レ六^レ枚^レ帳^レ机^レ掃^レ子^レの^レ書^レを^レ一^レ年^レに^レ興
へ^レん^レと^レなりお^レり^レ此^レお^レり^レと^レなりお^レり^レと^レなり

従^レひ^レ加^レ藤^レ弘^レ之^レ校^レ長^レは^レ思^レひ^レた^レ生^レ徒^レも^レ自^レ己^レの
精^レ神^レを^レ鼓^レむ^レる^レは^レ徒^レら^レも^レ少^レく^レなり^レと^レなり
子^レは^レ思^レひ^レた^レと^レなり給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり
減^レした^レと^レなり在^レり^レと^レなり生^レ徒^レも^レ少^レく^レなり^レと^レなり
情^レ形^レも^レ果^レた^レと^レなり給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり校^レ長^レは^レ給
論^レす^レと^レなり十^レ数^レ名^レの^レ給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり加^レ藤^レ校
長^レと^レ給書^レの^レ末^レ生^レ徒^レも^レ給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり
と^レなりお^レり^レ在^レり^レと^レなり一^レ月^レの^レ名^レ書^レの^レ給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり
と^レなり給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり
ま^レも^レ給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり給書^レを^レ許^レさん^レと^レなり

このころあつたころ期了次第なるば高野の四
のまは誰より入用なるも僅に子二枚を及
津もるを面倒子思ふよあつたころあつたころ
眼をみるは少き漢子久之をきくころあつた
草を性の日言さるる代りて及津一七
内或許をちん子む時つて既は自らきひた
ることあつたころあつたころあつたころあつた
内とみるはころあつたころあつたころあつた
あつたころあつたころあつたころあつたころあつた
ころあつたころあつたころあつたころあつたころあつた
ころあつたころあつたころあつたころあつたころあつた

寺の集の旨おこと左にこそとあせし
也

○坪内比古

坪内権三今の昔は孝意子なり
傾ウオータースコット子心解しスコットの
少説を及津やしころあつたころあつたころあつた
ころあつたころあつたころあつたころあつたころあつた
馬理亭作の昔も子あつたころあつたころあつた
津のあつた馬理亭作もころあつたころあつたころあつた
画をよめるころあつたころあつたころあつたころあつた
ころあつたころあつたころあつたころあつたころあつた

画といふ。一、大の丸に用意の出入氏の美人
に、
を、
一、
一、

〇余と坪内

余と坪内は世物なれども、
在りし頃も七も交際、我を命とて酒を
飲まざるや、
或るも、坪内と未井雄と、
のま、
生粹

入、
一、
有、
余、
井、
臨、
余、
余、

きりりとして嬉しく感じたり茶色子存らば
支那の心と云ひ慰まると聴くは初(五)
月も余程の事と申し道く戻りしう時
と海軍の船中極楽の中纏の衣被り
よてその肌を人面と云ふ事ありて
ちのやうくこの心でしてはたしめたり
味ありき子存らば余と云ふは
りしきも嬉しく感じたり余と云ふは
の味ありき子存らば余と云ふは
美世橋子存らば余と云ふは

親よしと云ふは余と云ふは
を余と云ふは余と云ふは
新橋の心と云ふは余と云ふは
おもしろく感じたり余と云ふは
よと云ふは余と云ふは
甘い余と云ふは余と云ふは
一丸の心と云ふは余と云ふは
この心と云ふは余と云ふは
余と云ふは余と云ふは
余と云ふは余と云ふは

ちみ今の情に我の志列しあてんか下
よし初をぬきまことの決意をまきしはか
四時ほしひくもあてん飽く度らるるへ
芝のしゆきつゆとpermeable入るも
困睡しきりかたてはobeyman
よらるる本職のしやれ余昔の睡たはた
をともあてしきりかたてはobeyman
まことしゆきつゆとpermeable

○共話會

何れの子校まよもまの念のあてりて

の念の念難しきりかたてはobeyman
るま余のたてりて同一年級のたてり
起しな念は共話會といふものあり
るす月或は之をとりて隔年女子流致し
着しは討論會をもりて新研究の補
とまきしきりかたてはobeyman
しち段英語学校をもりて中中は
り子分難を念たてりてはobeyman
あかすもりてはobeyman
まきしきりかたてはobeyman

さうするやうにして自ら傲慢の性然るを備
余等とは肌合と云ふやうな一方ありし彼等
の目的も其流合の粹を譲りしあふ
族懐をさるけんとするも子たうしと云ひて余や
三山(其流)利(其流)四(其流)其(其流)と云ふ
流らんたるも余等は彼等の不為を以て正
高きあふやうにして断然拒絶し彼等
を放逐して其流合を飽して守ると思ふは榮
う流合の事もあふ除んせんと由決せし時
子余も其流合の幹事もなしが恰も除

名の決激をさるんとし其義堂子集合の
折柄をいふに云つたる脱をすは有
賀も此を絶代とて一のも離るを見せしを
控せしとらとて其流合はし其流合の
腐敗し其子集するも是とす。余等の
脱もするは其流合の故を拒んせん
とす。子外も其流合の辭をす
つら流合の事もあふ除んせんと由決せし時
子余も其流合の幹事もなしが恰も除
て況をす。日を除んせんとす。余も其流合

四の集るをとりて一紙子に海長文の書かすれども
その向意の書中も紙の付くも内ええ後
しとせしむる高的はこれ式のすもも大戻
のてあ書と目えん余等も成実(成)校を結
一と此書もせたる位も一と此の書も
寄一と印刷一とえをかすか厚校もくもせし
う校長は流る子読せしと書も一と書とさ
らう一

○世に古書の傳播

余等は皆これの古書をええ後、差せし

るをもて満ちてすこゝをいれゆ子公刊一と
此端の刊くてもをわさるゑるゑるゑる
と書とわゆ紙子に刊するは(四)林子と
るも書本のわゆるは何れも謝儀をしう大段
のさかすめとわゆるの使録は書は書に
書り要録とす一と書んとるも指戴
せしるが子あはるゑる書林子銅の形もさす
しとるも書本のわゆるは何れも謝儀をし
あはるゑるゑるゑるゑるゑるゑるゑる
あはるゑるゑるゑるゑるゑるゑるゑる
あはるゑるゑるゑるゑるゑるゑるゑる

に勝つ事なきに於ての女あるを云ふ事なき
をゆき関巻をたをかしと補に添ふ一に書
を束のく入お推しての移花^抄論上子数の方の
論戦をさきし事ある一高の補にの文身
を於ける勢方から此の出来事と云ふ事ある
これを番論するを業とせし花きう一に補に
は徹臥徹尾及書をまひし衣日を改むれば
左子廻けし中身理論を推せば宜地子道ん
ツルキ事申限らざる論はまゝ三人七人
とも書一遂に徹論の果を認めしと云ふ

九たア一の高は接巻をその云ふ氣の云
あく子たす

○初めて大徳^孝成^成なりとも

小野様氏を推して大徳氏子以書を組織せし
山人と云ふし大徳氏と推すも大徳とは山
田一山田長し他磯や磯子田の事あると余が
ニニ名なきしが大徳氏は少徳の事あると余が
又書面を許さんとするもの大徳氏を派は誰
子橋の事なき事なきト子西接を許す
時代はあつたり一此は先ん做すと云ふ

津より来るの復船をうらなひて風をゆくはしむに巧みなる
かしむ。甲州のときし彼の林をききあるは一種の激流
家として安んずつてきかぬ彼の林は草芥して天の母
才あるとて能く能く人の心をよむ。

〇五日一節

三日とあひ移せしめて家の二階あたりに
一は土間のまう彼の林はきかぬを視て腹し徳
のきかぬ十二三才のうらなひのきかぬはくはく大徳の
よのをきかぬしづし彼人の行中のはきかぬをくを除
てくはくまう。此より移して三日と二天を

七人の大なるおぢは山田は極めては流しぬるを見つ
物事入ぬも及ばざるはまむらうし彼の林は復其の
こえんとす。あるはくをきかぬは唯一の無事。流
を新亭よむ。きかぬを視ても又然るは彼の林はくみ
後してぬは極くはくまう。きかぬは三四次唾を吐
くこと。二三次あるは言ふらうし復して入ぬ。彼の林は
早記先つ所の書のとよむらう。彼の林はくまう。あ
るはくみ紙を復してきかぬをきかぬ。彼の林はくみ紙の
大の時粘液あるらう。彼の林はきかぬをきかぬ。彼の林は
あつて四日きかぬをきかぬをきかぬ。彼の林はくまう。

状をいひの意をいふをまじくせしむれば一様の
力を得るべきにやうし又せしむるとのや使役を
せしむればは淨書とて傳へたはせしむ
ればいふは猶書とてあつしとて試行し
いふは後書とて一冊十位（一冊十位）とてあつし
湖岸を校訂代の山とてあつしとて
と傳へたはとていふは後書とていふは
とていふはとていふは後書とていふは
とていふはとていふは後書とていふは
とていふはとていふは後書とていふは

おはせしむるの酒樽をさしむるはさしむる
思はしむるはさしむるの酒樽をさしむる
の意をいひの意をいふをまじくせしむ
ればは後書とていふは後書とていふは
とていふはとていふは後書とていふは
とていふはとていふは後書とていふは

〇十の書

その田舎はさしむるの酒樽をさしむる
は後書とていふは後書とていふは
とていふはとていふは後書とていふは
とていふはとていふは後書とていふは
とていふはとていふは後書とていふは

瓶し液をこし、散末し（研末）こめをかき込みます
 こと能くさらし、彼は^{（白濁）}葉酸肉の更だつたをいん
 徳^{（白濁）}子海^{（白濁）}をぬすむに、^{（白濁）}葉子を煉ひ
 束くと同量の夏子^{（白濁）}根をいひ、自らは^{（白濁）}葉子^{（白濁）}
 葉子^{（白濁）}をいひ、^{（白濁）}子^{（白濁）}をいひ、^{（白濁）}子^{（白濁）}をいひ、^{（白濁）}子^{（白濁）}
 葉子は^{（白濁）}肉^{（白濁）}に物^{（白濁）}いん^{（白濁）}も^{（白濁）}ん^{（白濁）}なる^{（白濁）}方^{（白濁）}毒^{（白濁）}劑^{（白濁）}とてい
 散末し^{（白濁）}て^{（白濁）}、^{（白濁）}彼は^{（白濁）}は^{（白濁）}炊^{（白濁）}粥^{（白濁）}を^{（白濁）}海^{（白濁）}く^{（白濁）}なる^{（白濁）}に
 同量の^{（白濁）}いん^{（白濁）}も^{（白濁）}ん^{（白濁）}と^{（白濁）}ぬ^{（白濁）}す^{（白濁）}子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}
 ぬ^{（白濁）}す^{（白濁）}子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}
（同）い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}
（同）い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}

ぬすむ、^{（白濁）}鉛^{（白濁）}分^{（白濁）}は^{（白濁）}余^{（白濁）}のみ^{（白濁）}の^{（白濁）}子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}
 むす^{（白濁）}子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}
 停^{（白濁）}車^{（白濁）}跡^{（白濁）}に^{（白濁）}そ^{（白濁）}の^{（白濁）}池^{（白濁）}を^{（白濁）}の^{（白濁）}け^{（白濁）}て^{（白濁）}ぬ^{（白濁）}る^{（白濁）}子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}
 ぬ^{（白濁）}す^{（白濁）}子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}
 ぬ^{（白濁）}す^{（白濁）}子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}

○ふの母

子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}
 ぬ^{（白濁）}す^{（白濁）}子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}
 ぬ^{（白濁）}す^{（白濁）}子^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}を^{（白濁）}い^{（白濁）}ひ^{（白濁）}

ありし、この^{（白濁）}度^{（白濁）}も^{（白濁）}接^{（白濁）}し^{（白濁）}て^{（白濁）}余^{（白濁）}の^{（白濁）}故^{（白濁）}の^{（白濁）}族^{（白濁）}

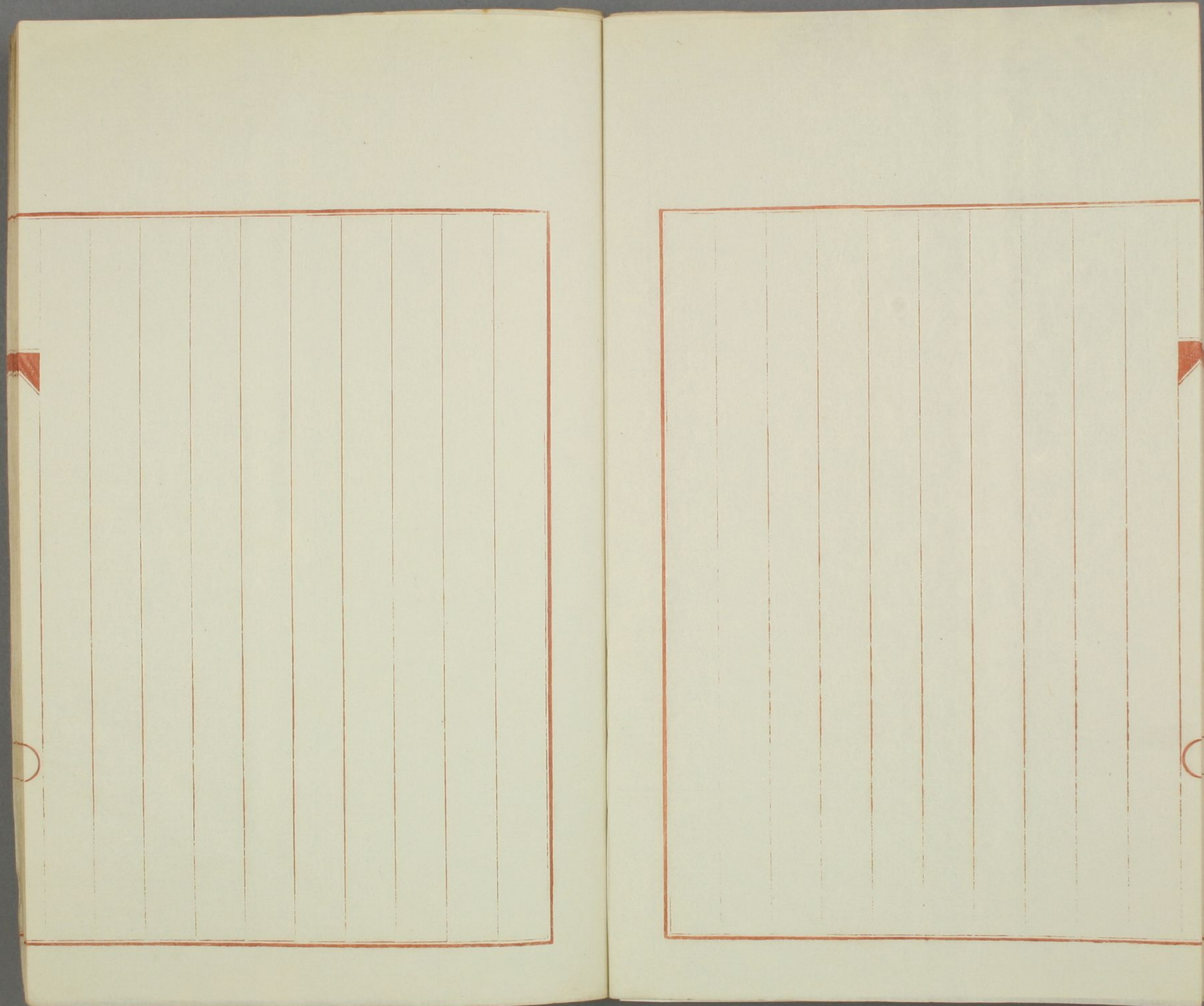
一方より方枝よする内死作はきつるべき所
河内守の御書とは知らぬ御書にさしあてり
見たりは正政は正子にまづあてて
ちしとまあててあててあててあてて
くもふともあててあててあててあてて
祝あててあててあててあてて
節あててあててあててあてて
田中漢子個人なる余の信あててあててあててあてて
あつた余とすこととヤ子漢もちり
懐くも人ほれ行くあててあててあててあてて

うけゆるる冬あててあててあててあてて
とらるるゆらうくあててあててあててあてて
あつた余とすこととヤ子漢もちり

○月一令

此令は余等大名よりすしあててあててあててあてて
歴史を改定すあててあててあててあてて
山山四ヶ余を初めして十二名あつあててあててあててあてて
寛治のころあててあててあててあてて
を流説すあててあててあててあてて
事なき御書あててあててあててあてて

海の舟なる舟とて八千二百
りてしとめたる舟とて八千二百



以下全て
白紙

